

「ニフォン」が「日本」になる時



巽 孝之

この6月末、アメリカ東海岸はマサチューセッツ州ニュー・ベッドフォードで行われたメルヴィル協会の第5回国際会議「フレデリック・ダグラスとハーマン・メルヴィル150周年記念祭」に出席した。黒人逃亡奴隷として出発したダグラスと巨大なマッコウクジラへの復讐物語『白鯨』を書いたアメリカ・ロマン派作家メルヴィルとを比較検討する趣旨の集まりで、ダグラスの自伝『わが捕縛、わが自由』（1855年）を再演するパフォーマンスやメルヴィルが船上の奴隷反乱を扱った傑作中篇「ベニト・セレノ」（1855年）のオペラ版も上演され、わたしは大いに楽しんだ。

ニュー・ベッドフォードといえば、19世紀にはアメリカ捕鯨のメッカとして栄華をきわめた都市である。だが21世紀を迎えた今日では、見る影もない。この町を最初に訪れたのは2001年だが、足を踏み入れるたびに、ここはゴーストタウンではないかという印象を新たにす。何しろ空港はないし、ボストンからクルマに乗るかバスに乗るかしなければならず、まともなホテルひとつ存在しないのだ。毎年1月に『『白鯨』マラソン』、すなわちかのメルヴィルの巨編をメルヴィル愛好家たちが1章ずつ朗読していくイベントが行われ、時折、今回のようにこの町ゆかりの作家メルヴィルをめぐる会議が開かれる時以外は、たぶん死んだように静まりかえっているだろう。会議の中心舞台は捕鯨博物館だったが、シンポジウムの最中にも、潮騒とカモメの啼き声が、必ずしも安普請ではないはずのホール内部にまで、響き渡る。このあまりにものどかなサウンドスケープほどに、とうに鯨油文明が用済みとなり石油文明が繁栄を誇る21世紀現在を実感させる装置はない。だからこそ、かえってわたしは、19世紀半

ばにはまさにこの捕鯨都市から多くの捕鯨船が繰り出し、遠く太平洋の彼方に巨大な「日本漁場」を抱えるわが国を捕鯨基地にすべく奮闘したことを、その結果、黒船による開国が成ったことを、思い返したものだ。

ところで、当時の日本はアメリカ人にはどう映っていたか。メルヴィルの『白鯨』では、白鯨(Moby-Dick)にエイハブ船長が片脚を食いちぎられるのも日本沖で、第109章「船室のエイハブとスターバック」の第2段落においてエイハブ船長が広げる海図にも、日本諸島の長大な東の沿岸が含まれる。それらの島々は具体的には“Nippon, Matsmai, and Shikoke”と記述されている。鎖国日本については絶対的情報量が少なかったから、「ニフォン」「マツマイ」「シコケ(シコーク?)」と読める奇妙な綴りについては問うまい。ここで肝心なのは、1841年にアメリカの捕鯨船が四国は土佐出身の中浜(ジョン)万次郎を救助しており、1848年にはアメリカ原住民はチヌーク族の血を引く鯨捕りラナウド・マクドナルドが単身、捕鯨ボートで日本海の鯨を求めるも自ら鎖国日本に捕獲され、宗谷や「松前」を経て長崎へ送られたあげく、日本における事実上最初の英語教師となっただけである。現代文学を代表するアメリカ原住民作家ジェラルド・ヴィゼナーもそのことを痛烈に意識したうえで、2003年には自身の民族と日本人とを鮮やかに類推する『ヒロシマ・プギ』なる傑作小説をものした。メルヴィルの記した地名群は、当時してみれば捕鯨ネットワークを読み解くための記号だったかもしれないが、150年後のいまから見ると、開国日本の起源を紐解くために不可欠な暗号なのである。

(たつみ たかゆき・慶應義塾大学文学部教授)